

アグコン審査員特別賞

経営・一ノ宮ゼミチーム



アグコンで審査員特別賞を受賞した福田さん、内田さん、芝さん(左から)

社、行政などにヒアリングも行った。厳しい意見もあつたが、福田さんは「さらに良いものにして」と議論を重ねることが楽しかったと振り返る。

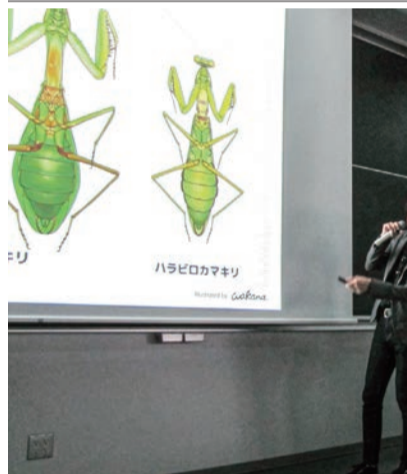
アグコンは今年で3回目。都内で開かれた大会には全国12大学から27チームが参加した。一ノ宮ゼミは決勝進出は逃したが、「夢があるプラン」と審査員特別賞に選ばれた。一ノ宮教授は「数多くの企業に精力的にヒアリングに赴き、想像以上に、都市農業の新しい形を描いてくれた」と健闘をたたえた。

食や農業について大学が調査研究し、その成果を競う「アグリカルチャーコンペティション」(アグコン、JA全中など後援)が11月24日に開催され、経営学部・一ノ宮ゼミチームが審査員特別賞を受賞した。

メンバーは3年次の内田直見さん、福田みずほ

さん、芝美咲さん。「農を魅力あるものとして捉えなおし人生を彩るアイテムとして提案する」とのコンセプトで、マンションや農地、地産地消レストラン、災害用備蓄庫などを備えた複合施設を提案した。

3人とも首都圏育ち。「農業についての知識や経験がなく、最初はどうしたらいいか途方に暮れた」と芝さん。2年次の12月から活動を開始し、専門書や小説を読み、農業を魅力的なものにするためのアイデアを絞った。一ノ宮教授には毎週必ず進捗よく状況を報告。JAやデベロッパ、マンション管理会社



ハラビロとムネアカの特徴を解説する山崎氏

自然科学研公開講演会

昆虫の知られざる生態解説

自然科学研究所(小林昭裕所長)の第22回公開講演会が12月7日、生田キャンパスで開かれた。今回は「カマキリとカミキリ」の知られざる生態がテーマ。山崎和久商学部非常勤講師(昆虫生態学)と、深谷緑商学部非常勤講師(動物行動学)が昆虫の世界で起

きている変化と影響について講演した。

日本にはハラビロカマキリ(ハラビロ)が広域に生息しているが、2000年以降、胸部が赤く、ひと回り大きいムネアカ(ムネアカ)が見つかるようになった。移入経路を推測する上で、山崎氏は中国など海外から輸入される竹ぼうきに着目。都内の動物園で納入している竹ぼうきに付着していた卵囊から幼虫を確認した。

外来種の場合、在来種への影響が懸念されるが、山崎氏は「飼育下の実験では種類の心配はない。分布状況を調べたかぎり、ハラビロがムネアカに駆逐されるといった分布の入れ替えがあったとは言えない」と指摘した。

深谷氏は、18年に特定外来生物に指定されたクビアカツヤカミキリが、6〜2センチという成虫の飛翔距離を挙げた。

深谷氏は「日本、米、中国の研究グループが共同でクビアカツヤカミキリが出すフェロモンの実験研究を進めており、防除に役立つ成果を目標している」と語った。

ネット情報プロジェクトの最終発表会が12月14日、生田キャンパスで開かれ、26チームが共同研究や開発した「プロジェクト」は学生自らが課題を見つけ、これまで学習してきた知識やスキルを活用し、チームを組んで取り組む。「本この出会い」がコンセプトの仲俣暁生プロジェクト。ワークショップの開催や本棚の製作、オリジナル本の刊行などを行った。リーダーの島内浪規さんは「本に触れてこなかった人たちが本を好きになるきっかけになれば」と語った。



第20回育友会奨励賞

9人と1団体が受賞

学業やスポーツ、社会貢献など国内外でのさまざまな取り組みを積極的に行った学生を表彰する第20回育友会奨励賞の表彰式が12月14日、神田キャンパスであった。個人9人と団体1組に、小林宏育友会長から賞状と奨励金が贈られた。

池原美穂さん(文4)

育友会奨励賞の皆さん

は専大附属高校で開講している「チーム作り講座」に学生運営メンバーとして参加。講座ではさまざまな生徒のことを誇りに思う。今後は大学院に進学してさらに研究を続けたいと語った。

自転車で日本一周を達成した二見涼介さん(法2)は「いろいろな人と出会い、旅でしかできない経験ができた。挑戦しやすかった」と胸を張って応答があった。

南アジアと私(石川雄也(経営2)) 昨年度育友会奨励賞からの続編11年間の活動(池原美穂(文4)) 「チーム作り講座」におけるキャリア教育実践(徳永帆南(文3)) スポーツチャンバラに出会って(笹村朱里(ネット情報2)) 地元観光大使を通じて(団体) 神原ゼミナール「藤工芸」(代表) 井関麻祐(商4) 失敗を挑戦に変える(伝統工芸品の魅力を後世へ 私たちの挑戦)



多くの来場者が訪れた仲俣プロジェクト

「プロジェクト」の最終発表会が12月14日、生田キャンパスで開かれ、26チームが共同研究や開発した「プロジェクト」は学生自らが課題を見つけ、これまで学習してきた知識やスキルを活用し、チームを組んで取り組む。「本この出会い」がコンセプトの仲俣暁生プロジェクト。ワークショップの開催や本棚の製作、オリジナル本の刊行などを行った。リーダーの島内浪規さんは「本に触れてこなかった人たちが本を好きになるきっかけになれば」と語った。

このほかにも、オリジナルキャラによる自己管理アプリを開発した沼見介プロジェクトなど、多彩な取り組みが発表された。

アプリの機能を解説する沼見介プロジェクトのメンバー

26チームが成果を展示

ネット情報プロジェクト

ネット情報プロジェクトの最終発表会が12月14日、生田キャンパスで開かれ、26チームが共同研究や開発した「プロジェクト」は学生自らが課題を見つけ、これまで学習してきた知識やスキルを活用し、チームを組んで取り組む。「本この出会い」がコンセプトの仲俣暁生プロジェクト。ワークショップの開催や本棚の製作、オリジナル本の刊行などを行った。リーダーの島内浪規さんは「本に触れてこなかった人たちが本を好きになるきっかけになれば」と語った。

アプリの機能を解説する沼見介プロジェクトのメンバー

混浴の理論とハラスメント

明白なセクシュアル・ハラスメントや人格否定の発言が言語道断なのは当然ですが、そうでなくとも「これはハラスメントか」という微妙な場面があります。私の担当する刑法の講義では、難解な概念の理解促進のために度々例えを用いますが、その過程でヒヤッとした経験があります。

刑法では、故意と過失をどう区別するのかという問題があります。講義では、「二つの段階の別々の審査を経て区別される」と説明するのですが、「一度区別したものを、なぜまた区別する必要があるのか」などとなかなか伝わらないことから、師匠の受け売りの「混浴の理論」で補足しています。「故意は男、過失は女。入り口で男女の区別は一心す

るが、混浴を認めるので温泉内では男女が混在している。だからもう一度区別の必要がある」との例えです。ここでは、入り口での故意過失の区別は完全ではないと理解してもらえ十分なのですが、うっかり「入り口で男の容姿だと思ったら、実は女だった」と余計な説明を……。LGBTにも配慮すべき時世では、「容姿だけで男女を区別するのか」などと学生にあらぬ誤解を与え、例えの意図に反して別の問題を起すかねないと、後の説明をしたことがあります。

例えば成功すれば「旨みなる方便」にもなりますが、教員として一言一句に注意しないと思わぬ陥穽に陥ることもありません。講義中の発言で不快な思いを抱く学生がいるかもしれないと自戒し、微妙なラインにも気を払いたいです。

(キャンパス・ハラスメント 対策室員・稲垣 悠一)